

2016年11月13日 礼拝メッセージ

聖書：使徒の働き 4章 32～37節

説教：心と思いを一つにして

あらすじ

ペテロとヨハネが宮の中で足のなえた人をいやしたことから、それを見ようと大ぜいの人々が押し寄せてきました。そこでペテロは、あなたがたは神から遣わされた主イエスを十字架で殺したのだと語り、罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて神に立ち返りなさいと勧めます。これを聞いていた祭司たちは、ペテロが盛んにイエスの名を口にしていることに腹を立て、逮捕し留置場に投げ込んでしまいます。翌日ふたりは釈放され、すぐに皆が待っている教会へと戻り、すぐに祭司たちに何を言われたのかを細かく報告します。「『またイエスの名を使って教えるようなことをしたなら、おまえとおまえの仲間にも危害を加えるからよく覚えておけ。』祭司たちはこう言って自分たちを脅迫しました。」

これを聞いていた人たちは動揺したでしょう。実際に肉体の暴力を受けなくても、いやがらせや脅迫、差別、あるいは言葉の暴力を受けるかもしれないのです。彼らはどうしたか。4章24節。「これを聞いた人々はみな、心一つにして、神に向かい、声をあげて言った。」祭司たちの脅迫を前にして、むしろ神のことばを大胆に語らせてくださいと祈ります。そして30節では、「御手を伸ばしていやしを行わせ、あなたの聖なるしもべイエスの御名によって、しるしと不思議なわざを行わせてください」と祈ります。それが前回までのあらすじです。

1 「しるしと不思議なわざを行わせてください」

今日の箇所に入る前に、なぜ人々はこのように祈ったのかを考えます。もちろん、神を信じる人たちが起こされるためにもかもしれないし、脅迫してくる人たちに立ち向かうためにとか、いろいろ理由が考えられます。でも大切なのは、この祈りに対し神はどのように応えられたのか、です。それはなにか。手がかりは繰り返される言葉にあります。読み進むと5章12節に4章30節とほぼ同じ言葉が繰り返されています。この二つの間にはさまれているところに、神がどのように応えられたのかが記されているはずですよ。

2 持ち物を共有とする

1) なぜ

ではそれは何であったのかと期待しながら読み進むと、戸惑うことが書かれています。32節です。「信じた者の群れは、心と思いを一つにして、だれひとりその持ち物を自分のものと言わず、すべてを共有にしていた。」

クリスチャンは土地や家を売ってまでして教会に献げなければならないのか。当然、そういう疑問が湧いてきます。あらかじめ申し上げておきますが、今私がこんなことを指導したら、間違いなくカルト集団と呼ばれるはずですよ。健全な教会であれば、全財産を売り払って献金しなさいというような指導はしません。安心してください。ではどうして聖書にこんなことが書いてあるのか。

2) 乏しい者のために使われる

ささげられたお金がどのような目的に使われたのかを見ておきましょう。二つのことが書かれています。まず一つ目は、34、35節。「彼らの中には、ひとりも乏しい者がなかった。地所や家を持っている者は、それを売り、代金を携えて来て、使徒たちの足もとに置き、その金は必要に従っておのおのに分け与えられたからである。」

どんな時代にも、どんな国にも食べる物に困るほどの貧しい人たちがいました。イスラエルも例外ではない。神はそのような人たちのことにも目を向けます。旧約聖書のレビ記19章には、収穫のときには全部取ってはならないと書かれています。食べる物がない人たちのために残しておきなさいということです。

新約の時代になってもこの精神は変わりません。余分に持っている人たちが教会に献金して貧しい人たちや病気の人たちを支えていきました。今私たちの身の周りに福祉施設とか病院があたりまえのようにあります。でも、歴史をさかのぼるとこれらの働きを始めたのは教会であったのです。そのために献金が使われていきました。

3)使徒たちの働きを支えるために使われる

では二つ目。33節。「使徒たちは、主イエスの復活を非常に力強くあかし、大きな恵みがそのすべての者の上にあった。」

もし教会に献金する者がいかなかったら、使徒たちは自分で働いて生活しなければなりません。労力がそちらに取られてしまいますから、みことばを語る事が難しくなります。でも主はなんと言われたか。「あなたがたは、キリストの死と復活を宣べ伝える証人とな

る」と言われた。実際、使徒たちはイスラエルだけではなく、海外にもわたって宣教活動をしていきます。その働きを支えるために教会が力を合わせていきました。そのために献金が使われていきました。

今、教会に献げられている献金もまったく同じ目的で使われています。

3 心と意思を一つにする（使徒の働き 2章42節）

1) 喜んで献げたのはなぜか？

さて、クリスチャンとして生活していくなかで、最も悩むことの一つに献金のことがあります。献金は強制ではないし義務ではないと言われるけれど、献金と聞くとなんとなく心が重くなる。

初代教会の人たちはほどであったのか。2章45節から47節を見ましょう。「そして、資産や持ち物を売っては、それぞれの必要に応じて、みなに分配していた。そして毎日、心一つにして宮に集まり、家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、神を賛美し、すべての民に好意を持たれた。主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった。」

もし強制されて義務で献げていたのなら、喜びなどありません。世の人々も見てすぐわかります。暗くて硬い表情をしていたら、そんなところに行きたいとは思わないでしょう。ところが、すべての民に好意を持たれたとあります。信じていない人たちにも、クリスチャンが喜びにあふれているのが見て取れた。自分もあの仲間になりたいと思ってくれた。ということは、初代教会の人たちは喜んで献げていたことになります。

私たちが知りたいのは、なぜこの人たちは

喜んで献げることができたのか、ということです。彼らは何か特別なことをしていたのか。それを知りたい。

2) 教えと交わり、パン裂きと祈り

そのことは2章42節に書かれています。「そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。」そして46節で「心を一つにして」と続きます。ここに書かれているのは四つのことです。ばらばらではなくてみなつながっています。一つ一つ見てみましょう。

一つ目。使徒たちの教えを堅く守っていた。言い換えれば、まず、聖書を開き、神のみことばを聴きくところからすべてが始まるということでしょう。神のみことばは生きていますから、私たちの心を鋭く突き刺します。逃げようとしても逃げられない。もう苦しくなって罪を告白するしかありません。

二つ目。その罪を告白する者同士が一つとところに集まり、互いに交わりをしていきます。そこでこんな会話がなされます。「あなたもその問題で苦しんでいたのですか。実は私もあなたと同じ問題で苦しんでいました。」自分だけ苦しんでいたと思ったら、ほかの人も同じ罪で苦しんでいた。自分の罪のことを恥ずかしいと思っていたけれど、隣の人が親身になって聞いてくれた。そんな分かち合いができたとき、どんなに荷が軽くなったか、みなさんは経験してきたと思います。

そして三つ目。パンを裂く。教会では、毎月聖餐式を行っていてこれもパン裂きと呼びますが、ここはもっと広い意味でとつてもよいと思います。罪を犯した者同士が交わりをしていくとき、私たちの慰めはどこにあるのか。こんな罪人のために主が十字架で死ん

でくださったということでしょう。十字架を思い起こすのです。それはまさにパン裂きの意味しているところではないでしょうか。

そして四つ目。十字架で死なれた主はどうされましたか。三日目によみがえり、今は天の右の座におられ、やがて再び私たちのところへ来てくださると約束してくださいませ。祈りにはいろいろあるけれど、でも最終的に祈りはどこに向かって行くか。主が再び来られて、私たちを完全に救い出してくださいませ。そこに望みをおいて祈り待ち続けていく。これが教会ではないかと思うのです。

今挙げた四つのことをしていくならば、神がくださる真の平安と喜びに満たされていくのだと言います。そして心と思いを一つにされていくのだと語ります。本当でしょうか。私は本当だと言います。この教会の姿を見たら、もちろん完全ではありませんが、この聖書に書かれているとおりのことが行われている。控えめに言っても、その方向を目指して歩んでいると自覚していると思っております。

3) 無理をして献げるのではなく

さて、最後にもう一つだけ触れておかなければならないことがあります。土地や家を売って教会に献げた人の例としてバルナバという人が出てきております。この人は後にパウロといっしょに伝道の働きに加えられていきます。疑問なのはどうしてバルナバという名前を出してわざわざ彼がこうしたと書くのか。実はこの話は5章に続いていきます。少し先取りして話しますが、そこにはアナニヤとサツピラという夫婦が出てきます。ふたりは持ち物を売って教会に献金をするのですが、そのとき嘘をついてしまう。その

ことが大きな問題となっていくます。

最初に申しあげました。この箇所のテーマはなんであるか。一見、どれだけ犠牲を払って信徒が献金をしたかという話に見えましたが、実はそれではない。彼らが祈ったことば、「イエスの御名によって、しるしと不思議なわざを行わせてください。」この祈りに神はどのように応えられたか。これがこの箇所のテーマだと最初に申しあげました。結論だけ言えば、アナニヤとサツピラによって教会に罪が入り込んだとき、しるしと不思議なわざが行われ、教会が罪からきよめられていった。そういう流れで書かれています。

アナニヤとサツピラは、自分の持ち物を売って教会に献金したのですから、たとえ少々の誤魔化しがあつたとしても、良いことをしたと評価されているのではと考えたくありません。

しかしこのふたりに起きた出来事から大切なことを教えられます。どれだけ献金したか、献金の多い少ないではない。どのような心を持って神にささげたのか。そのことを主は問いかけておられることがわかります。別の言い方をすればこうなる。本当に喜びに満たされて献げられたものであるなら、神はそれを喜んでくださる。もし、献げるときに喜びがないというのであれば、無理をしなくて良い。アナニヤとサツピラは一生懸命背伸びをして無理をしてしまったと言えます。その結果、このふたりは死んでしまいました。無理をしたら死ぬというのですから、絶対に無理をしてはいけません。献げたいと思うときが来るまで待てばよいのではないですか。

私たちがどこから救われてきたのでしょうか。神のひとり子を十字架につけて殺した。そのようなことをしたのに、神は私たちの罪

を完全に赦し、天の御国に招こうとされる。私たちに注がれている恵みはどれほど豊かなのでしょうか。ただそのことを思い起こしていくとき、聖霊が私たちのうちに働き、喜びで満たしてくださいませ。その時を待ちたいと願います。